論　文

保育実習における指導に関する一考察

Practical Teacher Training Methods in Infant Education

開　　仁　志
HIRAKI Hitoshi

Ⅰ　目的

富山短期大学幼児教育学科（以下短大）では、１年次に付属みどり野幼稚園での教育実習Ⅰ（主として観察実習中心）、外部での保育実習Ⅰの１（主として０～２歳児クラス配属）、保育実習Ⅰの２（外部での施設実習）を行う。２年次には教育実習Ⅰ（主として参加実習中心）を終え、外部での保育実習Ⅱ（主として３～５歳児クラス配属）と保育実習Ⅲ（外部での施設実習）、教育実習Ⅱ（外部での教育実習）を行う。

様々な実習がある中で、短大では、事前事後指導、実習中の訪問、実習懇談会を行っているが、実際の実習現場ではどのように実習指導が行われているかについて把握していない面もある。

ここでは、特に保育実習Ⅰの２（以下施設実習）を中心に調査、考察する。施設実習では、施設の種類によってねらいや求められる援助技術が違い、指導内容も異なってくることが考えられる。

現場での実習指導の実態と、具体的な指導の内容、実習前に短大に望まれる指導内容について明らかにしたい。

Ⅱ　方法

施設実習を対象としたアンケート結果を分析・考察する。

具体的には、１年次の保育実習Ⅰの２（平成19年２月19日～３月17日実施）終了後、本学幼児教育学科２年生（以下学生）101名にアンケート調査を行い、分析・考察する。

１　学生内訳
　男子学生　４名：女子学生　97名
　計　　101名

２　実施時期
　平成19年４月24日

３　回収率
　101名中100名（99%）

Ⅲ　結果及び考察

１　現場で行われている実習指導の実態

（１）施設の種類（図１参照）

ひらき　ひとし（幼児教育学科）

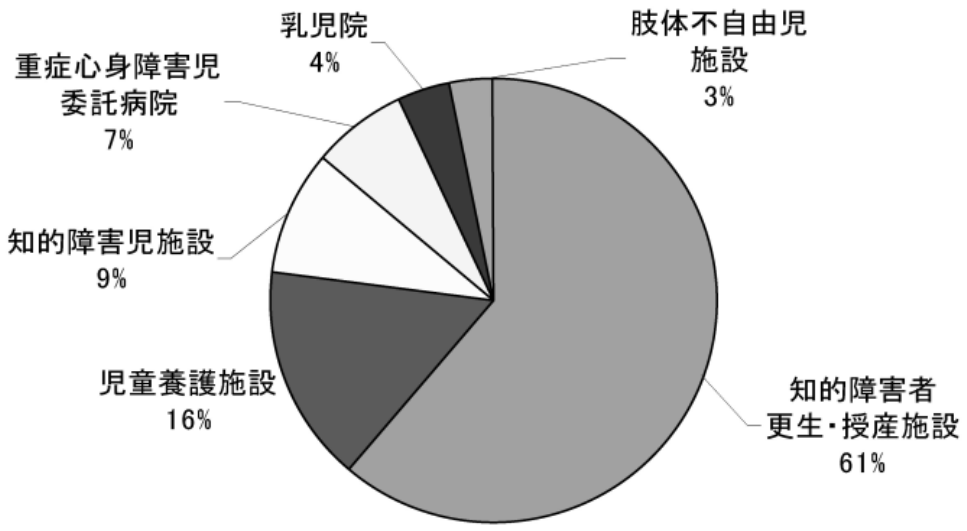

図１　施設の種類

学生の配属される施設の種類は、知的障害者更生・授産施設が一番多く61名（61%）、次いで児童養護施設が16名（16%）となっている。その他の施設も合わせると、全部で６種類の施設に配属されている。配属される施設の種類が違うことからくる指導内容の違いがあることが推測される。

（２）保育士の有無（図２参照）

施設内に保育士資格をもち、働いている職員がいたかどうかを聞いた。すると、「はい」が79名（79%）、「いいえ」が１名（１%）、「わからない」が20名（20%）になった。ほとんどの施設に保育士資格をもち働いている職員がいることが明らかになった。このことは、保育士資格を得ることを目的としている学生にとっては、安心感をうむと考えられる。しかし、保育士資格を持っている職員がいるかわからないと答えた学生にとっては、「保育士が一人もいないかもしれない施設で実習をしている」という不安感を抱える可能性があるのではないかと推察される。

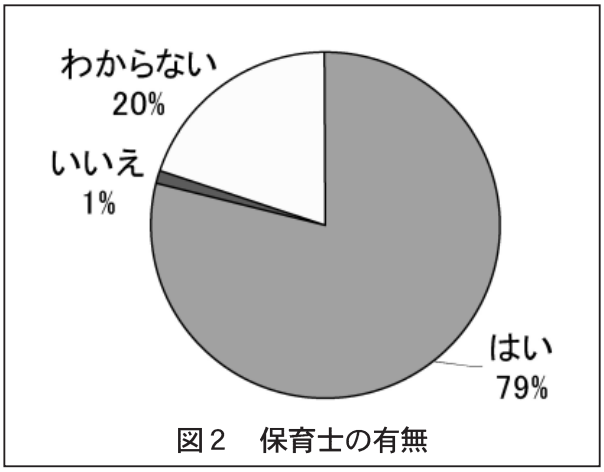

図２　保育士の有無

（３）担当職員の保育士資格の有無（図３参照）

実際に実習を指導した担当職員の保育士資格の有無を聞いた。すると、「はい」が38名（38%）、「いいえ」が13名（13%）、「わからない」が49名（49%）になった。実習を担当し指導する職員が保育士資格をもっていることで、学生にとっては、施設で働く保育士としてのモデルを得ることにな

り、実習意欲が増す等の有益な結果をもたらすのではないかと考える。

しかし、担当職員が保育士資格をもっていなかった場合は、施設における保育士の役割について示唆を得ることは難しいのではと考える。また、担当職員が保育士資格をもっているかわからないと答えた学生は、担当職員に保育士資格の有無を聞こうとする積極性が足りないか、意志疎通が図れていないなどの課題があるのではないかと感じる。

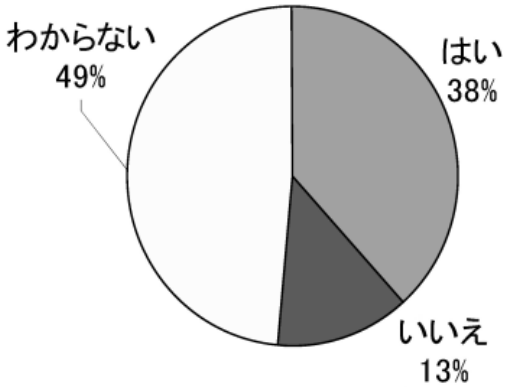

図３　保育士資格の有無

（４）担当保育者の経験年数（図４参照）

実習指導を担当した職員の経験年数は、初任者（１～５年）が９名（10%）、中堅（５～15年）が47名（55%）、ベテラン（15年以上）が30名（35%）であり、有効回答数（86名）の中では（14名は不明と回答したため除く）、実習指導を担当する職員は中堅以上で90%を占めている。実習指導を行うためにはある程度の経験や知識がいることから実習担当として中堅以上を当てていることが推察される。

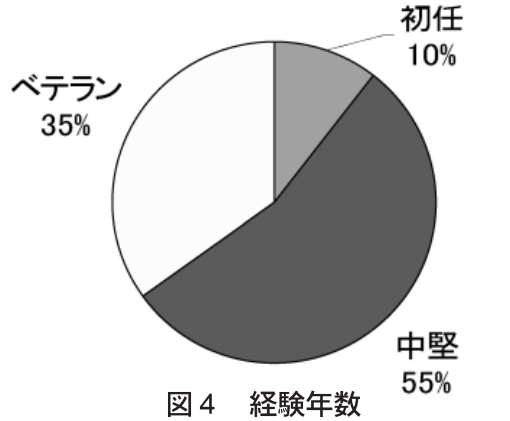

図４　経験年数

（５）反省会の頻度（図５参照）

毎日の保育実習終了後に反省会が行われている頻度を５段階評価で、「全く行われていない」から「全てある」まで回答を得た。すると、「ほとんどある」「全てある」を合わせても14名（14%）にしか満たない。逆に、「全くない」は52名（52%）にのぼり、「数回程度」の30名（30%）と合わせると、82名（82%）がほとんど反省会が無いと言える。

このことから、施設自体が多忙であり、反省会を設ける時間がなかなかとれないことや、保育実習での反省会をどのように持てばよいかという体制が整っていないことが推測される。

今後は、学生に対しては、保育実習Ｉの２（施設実習）では、ほとんど反省会が設けられないことを伝え、積極的にわからないことがあれば、職員に質問したり、働きかけたりする必要性を指導することが重要である。

また、短大から反省会の持ち方を実習現場と話し合い、連携をより深めていくことが必要である。

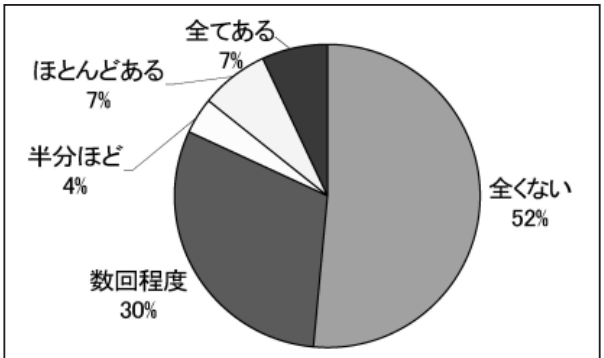

図５　反省会の頻度

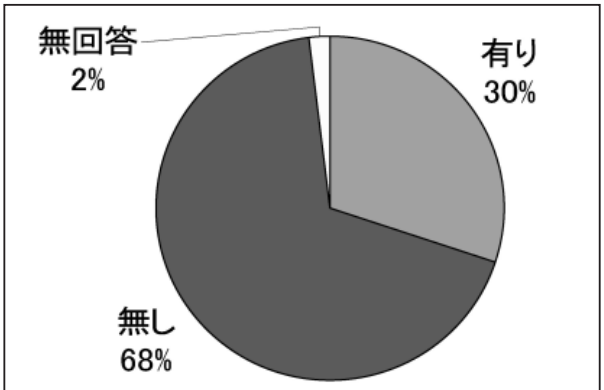

図６　指導案の有無

（６）指導案の有無（図６参照）

実習で指導案を書いたか否かを聞いた。すると、30名（30%）が有り、68名（68%）が無し、２名（２%）が無回答であった。

７割近くが指導案を書くことなく実習を終えている。短大も施設実習用の指導案の書き方の時間を特別に設けているわけではない。施設からも指導案の書き方について要望が多いわけではないことからそのような現状になっていると推測する。

しかし、指導案を書く施設は特定できる（表１参照）ことからも、該当施設で求められる指導案の書き方を事前に指導することが今後必要ではないかと考える。

２　指導内容の評価

実習において指導された内容を、５段階評価で聞いた。数字が大きくなるほど、指導に

表１　施設種類と指導案の有無

施設種類＼指導案の有無	有り:度数(%)	無し:度数(%)	無答:度数(%)	計:度数
乳児院	4(100)	0(0)	0(0)	4
重症心身障害児委託病院	7(100)	0(0)	0(0)	7
知的障害児施設	6(66.7)	3(33.3)	0(0)	9
児童養護施設	5(31.3)	11(68.7)	0(0)	16
知的障害者更生・授産施設	8(13.1)	51(83.6)	2(3.3)	61
肢体不自由児施設	0(0)	3(100)	0(0)	3
計	30(30)	68(68)	2(2)	100

おいてよい評価を受けていることを示している。

指導案の書き方に対する評価のみ、100名中30名（30%）しか指導案を書いていないことから、指導案を書き、指導を受けた学生のみの平均点となっている。その項目は参考程度ということで了承いただきたい。

（1）よい評価の指導内容（図７参照）

一番よい評価を受けているのが、「基本的生活習慣」である。宿泊の施設実習もあり、基本的な生活習慣が職員の目に届く状態で、高評価を受けていることは、短大での指導の成果ととらえることもできる。また、２番によい評価を受けている「手遊び・教材」であるが、保育者を目指している学生達にとっては、取り組みやすく、授業の経験を生かして高評価につながっているのではと感じる。

全体的には、５段階評価で平均点が３を下ることなく、おおむね学生はよい評価を受けていると言えるであろう。

（2）悪い評価の指導内容（図７参照）

指導内容の評価として平均点が低いのが、全体への対応である。全体への一斉の指導力というよりも、学生に関わってくる利用者や関わりやすい利用者とばかり関わるのではなく、自分からたくさんの利用者に関わっていく積極性を求められている。（表２参照）また、どうしても個別に関わることに

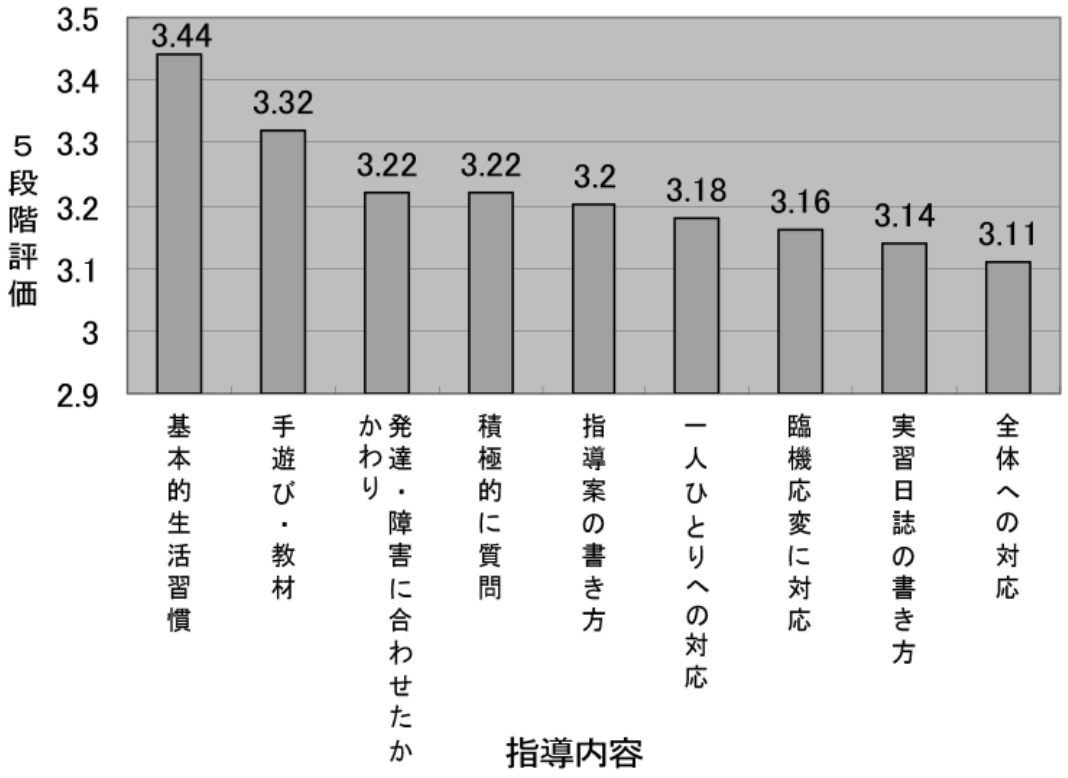

図７　指導内容別評価

とらわれすぎ、全体の確認がとれていないことなどが指摘されている。（表２参照）

次に低いのが、実習日誌の書き方である。誤字、脱字、文法の誤りの指摘と、利用者や職員の名前はイニシャルで書くことの指摘が多い。また、「～してあげる」というような上の立場からの表現や、一日の流れを追うのではなく、利用者本位で書くことへの指摘がなされた。（表3参照）利用者のプライバシーへの配慮、障害がある方とかかわる際の心構えを指導されていると推測する。

（３）施設種別と指導内容評価（図８参照）

保育実習Ｉの２では、６種類の施設に配属される。ここでは、施設種類によって指導内容の評価にどのような差異があるのかに注目し、その施設で指導の上で重要視されていることは何かを明らかにしたい。（指導案の書き方については、書かない施設も多いので、サンプル数が少ないことからここでは省く。）

先ず、基本的生活習慣の項目だが、全体的には、３以上の評価を得ており、本学の学生の評価は高い。しかし、児童養護施設のみ５段階評価の３

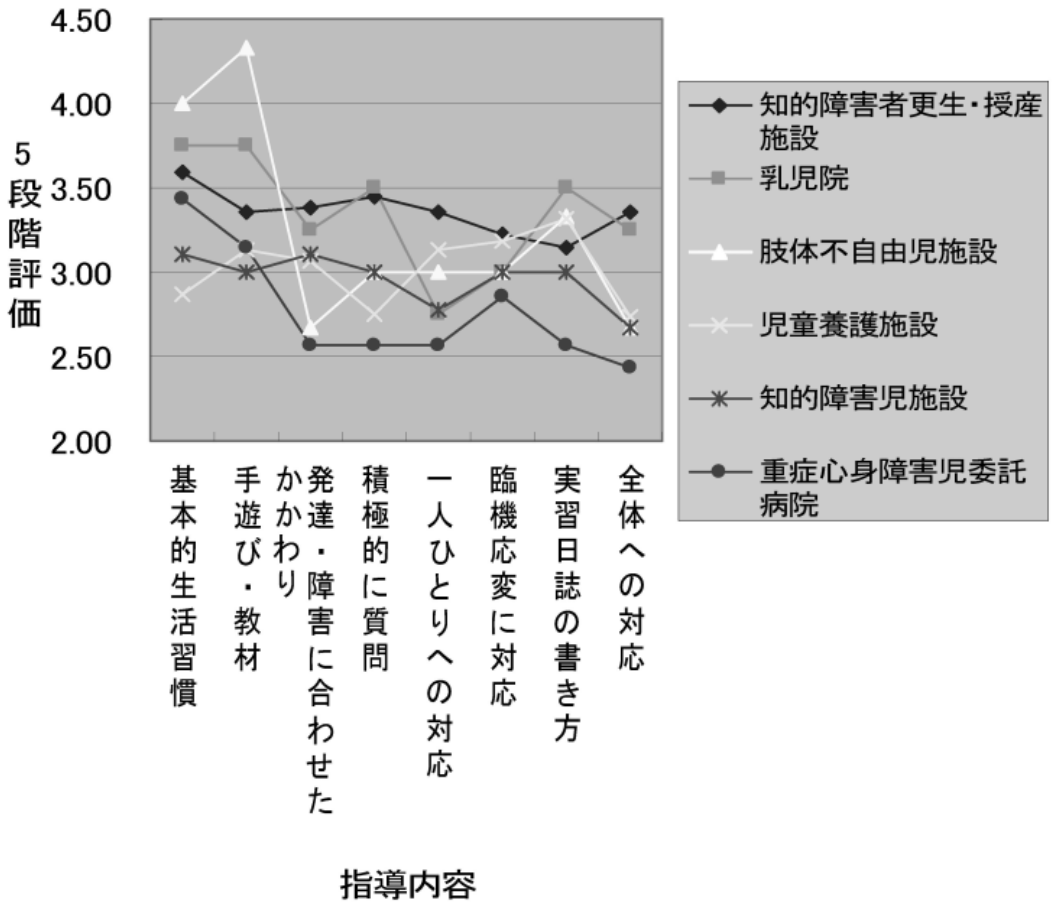

図８　施設種別と指導内容評価

表２　施設種類別の指導内容

指導内容／施設種類	積極性	利用者へのかかわり	基本的生活習慣・衛生面
児童養護施設	分からないことはすぐ聞く。積極的に自分から関わること。自分でやることを見つけて行動。	安全面に気をつけつつも全体に目を向ける。何でも制限するのではなく、特に危険なこと以外は子どもにやらせる。手ではなく、口で伝える大切さを子どもに伝えること。毅然とした態度をとる。自分の役割に合う言葉と態度をとる。乱暴な言葉に傷つかず明るく対応。	大きな声で挨拶。きれいに掃除すること。健康に気をつける。時間厳守。干してたたむまでが洗濯ということ。
乳児院		全体を見て行動。赤ちゃん言葉で話さない。	少しでも体に変化があったら報告。靴下を通勤時と実習時と分ける。危険防止の徹底。
知的障害児施設		年齢にあったかかわり。まず観察し、無理に行動しなくてもよい。子どもの強い口調や行動を気にしない。前に立たず、後ろから手助けする。伝えようとすることに耳を傾ける。不必要な言葉掛けをしない。危ないときは、逃げられる位置に気をつける。	
肢体不自由児施設	視野を広げて動く。	声をかけすぎない。周りの子どもへの影響も考える。年齢を考えて利用者と話す。	子どもの病気によってしてはいけないこともある。よく指導者に聞く。
重症心身障害児委託病院	介助だけでなく、保育士としての役割を考える。様々な職種の人から多くを学ぶ。	利用者の動きに合わせて自分が移動すること。個々に合わせた関わり。一人で任されるが、実際聞くだけではできない。	安全面。
知的障害者更生・授産施設	積極的に質問。	「～さんと呼ぶ」先輩と思い接する。積極的にかかわる。一人ひとりを観察し理解し援助。援助しすぎない。一人の大人として接すること。利用者の立場に立って負担のかからない援助。社会に出て生活することを考えた支援。言葉だけでなく手助けもしながら援助。全体を見ること。	言葉遣い・服装・体調管理・時間厳守。

表３　実習日誌で指導された内容

指導内容 施設種類	文法	個人情報	特殊な書き方	内容
児童養護施設	○誤字			○子どもと接すること以外の仕事も多いので書く。
乳児院				○毎日の流れよりも子どものしたことを中心に書く。
知的障害児施設		○子どもの名前はイニシャルで。 ○先生の名前は書かない。		
肢体不自由児施設				○心に残ったエピソードを書く。
重症心身障害児委託病院	○漢字			○相手の気持ちを書かずに、どのようなことを学んだか、何が分かったのかを書く。 ○大切なことを要点だけ書く。
知的障害者更生・授産施設	○漢字 ○「～してあげる」と書かない。 ○「世話をする」ではなく「援助する」「支援する」 ○利用者への敬語はいらない。	○子どもの名前はイニシャルで。 ○先生の名前は書かない。	○職員はスタッフ、利用者はメンバー。	○利用者と職員の会話内容を書かない。出来事だけでよい。

を割っている。これは、児童養護施設では、児童と実習生が生活を共にするという側面が強く、基本的生活習慣の確立においてモデルとならなければいけないことから、より厳しい指導を受けていることが考えられる。次に、手遊び・教材の項目では、全ての施設で３以上の評価を受けており、一定の評価があると考えられる。

発達・障害に合わせたかかわりの項目では、肢体不自由児施設と重症心身障害児委託病院で両施設ともに３以下と低い評価になっている。これは、障害に対してどのようにかかわればよいかの指導が短大において不足気味なことや、障害の程度から求められる援助技術が高度であること（介護・看護レベルが求められていると推測される）から評価が低くなっていると言えよう。

積極的に質問するという項目では、児童養護施設と重症心身障害児委託病院が低い。より積極性が求められていることを強調した事前指導が必要と考える。

一人ひとりへの対応の項目では、乳児院、知的障害児施設、重症心身障害児委託病院が低い。低年齢ということからくる個別対応の必要性、障害への対応からより一層指導がなされていると考えられる。

臨機応変に対応するという項目では、全体的に平均点が３に近いので、可もなく不可もなくという評価と考えられる。学生に臨機応変に対応することまでは求めていないというのが、現場の意識なのではないかと考える。

実習日誌の書き方では、重症心身障害児委託病院のみ３以下の評価2.57となっている。他の施設では、３以上の評価なので、重症心身障害児委託病院で求められる実習日誌の書き方と短大の指導にズレがある可能性がある。今後、重症心身障害児委託病院に配属される学生には配慮が必要と考える。

全体への対応では、児童養護施設、肢体不自由児施設、知的障害児施設、重症心身障害児委託病院の４施設で３以下の低い評価を受けている。全体を見る視点は、学生や初任者には難しいことが推測されるが、今後さらに指導を要する点と言えよう。

施設の種類によって、求められることの重要度に違いがあることがわかってきたので、今後も施設種類別に事前指導の内容を吟味し、保育実習の指導にあたらなければならない。また、高評価を受けやすい施設や、逆に低い評価が出されがちな施設があることが推測される。学生にとって今後につながるような実習にする観点から、メンタルな部分も含んだきめ細かい指導が必要とされる。また、指導の在り方について、短大と実習施設との話し合いの場を継続的に設け、連携をとっていく必要があろう。

3　学生が短大で実習前に望む指導（表４参照）

実際に実習を行った上での要望としては、大きく分けて、①施設・利用者への理解、②援助・技術、③心構えについてに分

類できた。

①の施設・利用者への理解では、障害や施設の在り方についてもっと具体的に知りたいことから、授業の充実を要望している。

また、②の援助・技術では、児童養護施設では生活をする上で必要な裁縫や洗濯といったことも挙げられ、学生自身が、家庭で学んでいるべきものが身に付いていないことが推測される。また、病院や施設などで必要とされる介助の技術や病気についての具体的な援助については、幼児教育学科では実施していない。配属される施設によっては、その援助ができるという前提のもと実習が行われるところもあり、短大の指導と現場の感覚のズレが生じていると考える。対策としては、福祉学科で行っている介護技術などの授業を数回受講するなどの手段もあるのではと考える。

③の心構えでは、先輩から直接施設の様子を聞きたいという声が多かった。この取り組みは、徐々に幼児教育学科でとりいれつつあるので、今後も続けていきたい。また、実習前にボランティアに行き、体験するとよいという意見がある。授業時数の関係もあり、平日にボランティアに行くことは難しいと考えられるが、なるべく、土日などを利用してボランティアを行うことを奨励する方法を考えてもよいだろう。さらに、後半の学生は春休み中に始まるので、心構えの面で不安という声もあるので、今後どういった面で学生を心身ともに支えていくことがよいのかが、検討課題である。

まとめ

施設実習が現場でどのように行われているかが学生のアンケートから明らかになってきたと考える。やはり、施設実習では、施設の種類によってねらいや求められる援助技術が違い、指導内容も異なってくる。今後は、より一層施設の種類に合わせた事前事後指導の在り方が必要となってくるであろう。また、宿泊を伴ったり、実習時期が冬季に及んだりすることなどから学生への負担も大きいと考えられる。今後も継続的に学生のアンケート調査をとり、改善点を探ることにより、よりよい保育実習指導につながるようにしていきたい。

（平成19年９月25日受付、平成19年10月31日受理）

表４　施設実習前に短大の指導で望むこと

望むこと 施設種類	施設・利用者への理解	援助・技術について	心構えについて
児童養護施設	○専門的な心のケアについて。 ○子ども同士のケンカの対応。	○洗濯や裁縫を学ぶ。	○先輩に聞きたい。
乳児院		○事前にどんな活動をすればよいか考えておく。	
知的障害児施設	○障害について。 ○施設のビデオを見たい。		○施設職員は初めての実習と理解して対応してくれた。
肢体不自由児施設	○指導者との関わり方。 ○病気について。		
重症心身障害児委託病院	○病院での保育士の役割を考える。 ○重症心身障害者に対しての詳しい勉強。 ○どんな利用者がいるか知りたい。	○大人のおむつ交換など、介助ができるという前提で迎えられる。介助の仕方の研修があればよい。	○良い面ばかりではなく、大変な面も教えて欲しい。強い心をもつこと。
知的障害者更生・授産施設	○知的障害等様々な障害の名前や症状の授業あればよかった。	○排泄・入浴・車いすの介助方法。障害への介助の仕方の指導。 ○利用者との対応、話しかけ方。 ○発作への対応。 ○体の動かない人の対応。 ○知的障害者に対する遊び。 ○言葉以外のコミュニケーション。	○前回実習した先輩から直接話を聞く。 ○ボランティアなどで偏見を無くす。 ○実際に施設の見学をじっくりとする。 ○後半は春休み中に実習が始まるので心構えができにくい。実習直前にもう一度集まり指導があればよい。